

「沢田マンション超一級資料 世界最強のセルフビルド建築探訪」**加賀谷 哲朗／著 築地書館 2007年9月発行
2階郷土資料(請求記号:K365-52)**

バーのカウンターの向こうの女の子の話を聞くともなく聞いていたら、彼女は沢田マンション（以下、沢マン）の住人になりたくて高知に来たのだという。へええっと驚いた。

今やサブカルチャーの申し子みたいになった沢マン。大学生の頃、「朝目ざめたら、窓ガラスにタコが貼り付いていてね。タコ、そう、海にいるタコだよ」という沢マンにまつわる都市伝説めいた話を聞いたことがあったが、どうやらその頃から、沢マンのサブカル化は始まっていたのではないかと憶測する。少なくとも僕が小学生の頃の沢マンは、確かに強烈なインパクトはあるものの、よくボヤを出す事と新聞少年泣かせ（何しろ内部は迷路のようだし、部屋番号は順不同。ちなみに部屋番号の秘密は本書を読むとわかります）な事で知られているくらいだった。時とともに人々の関心も移ろいでいくものだと、しみじみ思う。本書は、沢マンを世界屈指のセルフビルド建築として捉え、その歴史、オーナー夫婦のエピソード、建築学的な観点からみた様々な特色、住人の横顔など、まさにタイトルにも謳われているように、沢マンに関するあらゆる資料を収めている一冊である。巻末には各階の平面図もばっちり収録。これさえあれば、新聞少年たちも泣かずに済むというものだ。

ところで、人々の中での沢マンの立ち位置が変わったのと同様に、あるいはそれ以上に大きく、沢マンの周囲の状況も様変わりした。田んぼはアスファルトの底に沈み、あとには四車線の道路やらスーパーやら大型家電店やらが、どかどかとできあがった。いったいどこの誰が、スタバのベンチに座って沢マンを眺める日が来る事を想像できただろう。本書を読むと、沢マンが建築物としても住居としてもとても魅力的であることが、よくわかる。ただ、田んぼに囲まれたかつての沢マンの姿を知る者としては、夏の夜、うるさいほどのカエルの声に包まれて眺めた沢マンの威容、田んぼの水に窓から洩れる光を映して、さながら港に停泊する大型客船のような姿を見せていた沢マンのことが、懐かしく思い出される。そして懐かしがり屋の僕としては、あの沢マンの姿こそが最も魅力的な姿だったなあ、と、ついおセンチな気分になってしまうのである。

「秘密」**東野 圭吾／著 文藝春秋 1998年9月発行
2階一般開架図書(請求記号:F/ヒカシ)**

スキーバスの転落事故で病院に運ばれた妻と娘。妻は息を引き取るが、一命をとりとめた娘の体に宿っていたのは死んだはずの妻だった…。これだけを読めば「小説でありがちな話」そう思うかもしれません。私もその1人でした。

1999年、小林薫、広末涼子主演で同名の映画が公開された時、「原作すごくいいんだよ」と聞かされて初めて原作本があることを知り、「映画観る前に読まない方がいいよ」の忠告も聞かず、借りたのがこの本との出会いでした。どんどん「娘の生活」になじみ、夢や希望にあふれる妻に対する「嫉妬」「不信感」、自分だけ取り残されたような「喪失感」。夫の立場と父親の立場の狭間で苦悩する夫と、その思いをわかっていながら、「娘」にも「妻」にもなれない妻。複雑な状況におかれた夫婦の心情がとても上手く描かれていて、どんどん引き込まれました。愛する夫のためにしてあげられる事…妻が下した決断はあまりにも残酷で、俗に言う「感動モノ」ではありません。2人が背負った「秘密」に愕然とし、やりきれない気持ちでいっぱいになるはずです。いまだにこの本を目にするととても切なくなります。それほど衝撃的で一番心に残っている1冊です。 （余韻が強烈なので就寝前に読むのだけはオススメできません）